

## VI 意識調査分析委員からのコメント

### 意識調査から見たひきこもりの現状と課題について

日本福祉大学名誉教授

日本福祉大学心理臨床相談室

竹中哲夫

#### [1] 全体的な感想

この調査の結果整理においては、「ひきこもり群A(内閣府の定義による)」と「ひきこもり群B(統合失調症や妊婦並びに家事・育児などを理由にひきこもり状態にある人)」を合わせて「ひきこもり傾向群(A + B)」として分析しているため、ひきこもり傾向群(A + B)、ひきこもり群A、ひきこもり群Bをそれぞれ視野に入れて検討をした。なお、本調査と内閣府調査およびその他の調査とのひきこもり群の出現率の比較対象については、「調査の概要」の[参考]を参照していただきたい。

#### 1 主として若者の意識に関する把握について

(1) ひきこもる人は、ひきこもり傾向群(A + B)として、全般に見ると、長期化、高年齢化しており、初発年齢も高くなっている。このことは、必ずしも不登校との関連だけではなく、その後の諸事情でひきこもっている人が増加していることをうかがわせる。不登校前後の対応に加えて、青年期のこころの特徴、青年がおかれた社会的位置(雇用問題、就労環境を含む)などに配慮した支援が必要になることを示唆している。

(2) この調査ではひきこもり傾向群全体としては、女性の比率が高い(男性33.3%、女性61.1%)結果であった。他の調査では、ひきこもり群は男性比率が高い。内閣府の「若者の意識に関する調査報告書(平成22年7月)」の場合は、「ひきこもり群」の男性比率は66.1%、女性比率は33.9%である。島根県の「ひきこもり等に関する実態調査報告書(平成26年3月)」では、「ひきこもりの状態の方等」の男性比率は71%、女性比率は24%である。

これは、今回の調査の整理が「ひきこもり傾向群(A + B) = ひきこもり群A + ひきこもり群B」としていることの反映であろう。ちなみにA群は7人、B群は11人が該当者である。A、B両群を別々に見ると性別比率において違いがある。

ひきこもり群A 男性71.4% 女性28.6%

A群の男女比率は、他の調査結果と共通している。

ひきこもり群B 男性9.1% 女性81.8%

B群の男女比率は、顕著に女性比率が高い。

(3) B群の特徴は、A群と比べて、年齢(問2)は、各年齢段階に分散している。同居家族(問3)に配偶者(72.7%)と自身の子ども(45.5%)が多い。

また、普段自宅でよくしていること(問15)では、家事・育児をするが81.8%である。外形的には専業主婦(主夫)という形態である。

このB群の顕著な特徴は、普段の外出頻度(問17)であり、普段は家にいるが趣味に関する

る外出はする人が45.5% (42.9%)、近所のコンビニなどに出かける人が54.5% (42.9%)である。また、自室から出るが家からは出ないという人は0 % (14.3%)である ( ( ) 内はひきこもり群A)。半面、仕事や学校、遊び等で毎日外出する人が0% (ひきこもりA群も同じく0%)である。ひきこもり状態になってからの期間 (問19) も7年以上が36.4%であり、低い値ではない。6か月～1年未満は36.4%である。その他、現在困っていること (問24) では、精神的不調や収入・生活費のことで悩んでいる傾向が見られる。問25-5では、初対面の人との会話が難しい人 (A群の85.7%ほどではないが) もいる (54.6%) ことが分かる。悩みを相談する相手 (問28) としては、関係機関に相談したくない人が多いが、配偶者に相談することは多い。配偶者に相談できるので外部に目が向かわないとも言える。誰にも相談しない人は9.1%にとどまる。ひきこもり群Aが、誰にも相談しない比率が高い (28.6%) ことと対照的である。

これらから、ひきこもり群Bは、女性が大半であり、家事・育児はしているが外出頻度は低いという状況である。悩みはあるが家族内で完結させている。しかもこの状態が、3分の1強の人は7年以上に及んでいる。その意味で「ひきこもり群」なのである。

(4) ひきこもり群Bの回答により、女性のひきこもり状態が少なくないことが浮かび上がった。B群は、ひきこもり傾向という現象面ではA群と似ているが、B群の人たちは、多くが既婚者であり、配偶者と同居している人が多く(72.7%)、実子との同居も45.5%である。A群の場合は、配偶者と同居している人は47.9%であり、実子との同居は14.3%である(問3)。B群の場合は配偶者・実子との同居率が高く、悩みがあっても外に頼らず、家族内で処理している傾向が強いことが読み取れた。

(5) ひきこもり傾向群 (A + B) は、小中学校での経験 (問8) については、「小中学校での不登校経験した」が0%という回答状況であるが、この群は、学校での適応には難しさがあったようである。登校しつつ悩んでいたということかも知れない。半面、小中学校時代の家庭での経験 (問9) の特徴として、親との関わりにくさが読み取れる。親の自覚とは別に、本人には、親から主体性を尊重されなかったという思いがあるようである。

また、問20の「現在の状態になったきっかけ」としては、不登校(小中学校)と高校になじめなかったがいずれも5.6%である。このように「ひきこもるようになったきっかけ」を問うと不登校の回答が現れる。しかし、きっかけは、その他(38.9%)、病気 (27.8%)、就活がうまくいかなかったり、職場になじめなかったがそれぞれ11.1%ある。きっかけと感じられていることは、不登校関係問題、就労関係問題、病気、その他に分散している。ひきこもりのきっかけは多様であることをうかがわせる。支援においても幅広い対応が必要であることがうかがわれる。

(6) 上記の「きっかけ」について、ひきこもり群A、ひきこもり群B を分けて、「その他」回答を除き、それぞれの上位2番目までを他と比較すると次のことが分かる。

ひきこもり群A： 不登校(小中学校)14.3%	高校になじめなかった14.3%
ひきこもり群B： 同上 0.0%	同上 0.0%

ひきこもり群A：病気	14.3%	妊娠した	0.0%
ひきこもり群B：同上	36.4%	同上	18.2%

両者は対照的であり、A 群(男性比率が高い)は、不登校など社会・学校適応問題が主であり、B 群(女性比率が高い)は、精神障害などの病気、妊娠が主である。

(6) ひきこもり傾向群には、自分自身について(問25-4)、自分を特別な存在であると思う傾向がある。これは、必ずしも客観的な事実に基づくものではなく、現在の自分に納得できない、もっと別の自分があるが実現していない、という思いがあるからであろう。加えて、社会経験が乏しく、自己を客観的に評価できない傾向も影響しているであろう。支援においては、彼らの思いを尊重しつつ、徐々に社会的視野を広げていくような配慮が必要であろう。

(7) 相談したい機関(問22)については、親身で、無料で、自宅から近いところ、という回答が多い傾向があり、医学的助言、精神科医がいる、こともこれに続いている。相談の専門性があり、市町村単位で、公的相談機関(無料・低料金・近接地)が数多く必要であることを示唆している。現状ではこのようなニーズに十分対応できる状態の地域は多くはないであろう。また、現在困っていることも多岐にわたり、相談機関が多面的な課題に対応できるだけの幅広さが求められる。多職種共同とか、多分野協働(ネットワークの充実)が求められているようである。なお、「あてはまるものはない」が2番目に多い気とも注目される。

## 2 主として市民の若者に対する意識について

(1) 自立した若者の条件(問29)について、ひきこもり傾向群は、日常的対人交流が強調されている。社会的・経済的自立は低くなっている。

その他の市民の若者に対する意識は、親からの経済的自立、集団のルールを守る、自分のことは自分で決めるなどが多い。就労していることが自立の条件であることが示唆されている。

(2) 「近所の人や親戚・知人にひきこもりにあてはまる人がいる」(問30-3)は、11.1%(実数75人)がいると高率の回答であった。同じひきこもる人が、一部重複して計上されている可能性はあるが、ひきこもり傾向群18人の4倍強というかなり大きな数値である。この背景には次のことがあるかも知れない。

①本人・家族は、ひきこもりの事実を表明したくないことがある。そのため事実が潜在してしまう。しかし、長期化・年長化する場合は、認めざるを得なくなる。そのため統計的には年長化がより際立ってくるのかも知れない。

②近所の人の場合、若者のひきこもりはかなり目につき気になるであろう。そのため、過剰評価もあるかも知れない。長期化した場合、近隣の人からは、その家にひきこもりの人がいることがいつしか忘れられているかも知れない。

(3) ひきこもりの背景・支援について(問31)は、多様な支援を求める声が多い半面、自己責任という声もある。ひきこもりをどう見るか。まだ市民的視点には、ひきこもりを自己責任とする面がある。自己責任を強調すぎると、現代社会における若者問題の認識が希薄になりがちであり、また、実際に困っている本人・家族への支援の充実が遅れる心配がある。ここに注意して、十分な対応が必要である。

(4) 特に必要な支援(問32)については、これまで関係者が重視して取り組んだ多様な支援の必要性の理解が広まっているようである。常設の居場所、支援者の人材育成、家族支援の充実、就労支援、支援者ネットワークや支援センターの設置などにわたり、幅広く必要性が指摘されている。

(5) 地域社会に求められるもの(問33)も、共通して、若者を社会的に包摂することの強い要求が読み取れる。それだけ生きづらさを抱える若者が社会的な疎外感(被排除感)を持っているという認識が共通に広がっているようである。これらの共通認識に依拠し、今後の支援活動において支援関係者・当事者・市民各層との連携した取り組みをいっそう積極的に推進することが必要である。

## [2] 今後の支援施策のあり方(課題)について

以上の結果から今後の施策のあり方についていくつか指摘しておきたい。

(1) ひきこもりの長期化・年長化は、若い時期に適切な支援が不足していたことの現れでもある。不登校世代から30代40代までを視野に入れた実態把握と各年齢層に対応した支援体制の強化が必要である。

(2) ひきこもりの長期化・年長化は、青年期の社会的包摂が十分でないことも示している。社会の中に若者を暖かく迎え入れるための相談施設(窓口)の開設、若者が自由に集うことのできる居場所・広場等の確保が必要である。相談施設については、専門性と合わせて親身・無料(低額)・住まいに近い(交通の便がよい)等の特質も考慮しなければならない。そのためには、遠隔地域には出張相談なども必要かも知れない(相談予約を得た上で、地域に出張相談の窓口を確保する)。

(3) 相談を受けた場合、あるいは、アウトリーチにより課題を発見した場合は、長期的視点から包括的な支援体制によって対応することが望まれる。

そのためには、若者支援の広範な機関・施設が連携できるネットワークの形成・支援チームの形成が必要である。

(4) 今回、ひきこもり群の中でも、特にひきこもり群Bにおいて、子育て世代(子育て中)の女性たちが多いことが判明した。子育て世代の女性たちの一部が、社会的に孤立している状況は、本人だけでなく子ども世代にも影響が浅くないであろう。この人たちが、適切

な社会関係につながるためにはどうしたらよいであろうか。女性たちが安心して交流し、自己の問題や子育てなどについて語り合え、また専門的相談支援により課題が解決するような施策が必要である。当面、相談施設に女性の時間とか女性の交流の広場、女性相談の日などを設けることも一つの解決策であろう。

(5) 若者が社会的に包摂されるためには、労働問題が避けて通れない。生きづらさを抱える若者がそれでも働く意欲を高め、参加可能でありかつ将来の展望も持てるような働く場の開拓、労働環境の整備などが重要な課題である。地域の雇用・労働分野・企業分野の関係者の深い理解と協力が得られるよう働きかける必要がある。

(6) 若者問題は時代とともに変化していく。このことを踏まえ、市民各層、支援者、行政職員、ボランティアなどの人々が若者問題を理解し、直接的・間接的に若者支援・若者の社会的包摂の事業に参画できるようにするための多様な取り組みが必要である。

若者問題の連続学習会・講演会、住民参加の若者問題のシンポジウム、若者自身の声を聞く会、若者問題に関する資料集の発行など多様な取り組みが必要である。このような取り組みが住民に周知されるよう広報活動にも特段の配慮が必要である。

(7) 若者問題に積極的に取り組んでいる他都市の経験に学ぶため、現地視察や他都市の若者施策関係者・若者支援関係者を招いたシンポジウムや講演会を開催する必要がある。

# ひきこもり調査についての精神医学からのコメント —とくにひきこもりA群とB群と親和群について—

心療クリニックパティオちた院長  
水野信義

## 1 はじめに

(1) 「統合失調症や妊娠ならびに家事。育児などを理由にひきこもり状態にある人」の扱いについて

内閣府の2012年の調査では、ひきこもり群に「統合失調症や妊娠並びに家事育児を理由とするもの」を除外して集計しているが、今回の調査ではそれを加えた（従来のひきこもり群をA群とし、追加したものをB群とする）。その理由は、B群をみると、ひきこもり期間が6か月から1年未満という方はともかく、7年以上という人が36.4%もあり、5年以上が45.5%になっているため、一つの課題として検討する必要があると思われるからである。

(2) 集計について、一応両群合わせて「ひきこもり群」としたが、男女の構成もA群で男子が多く、B群で女子が多いが、合計すると特徴が見えなくなるので、一部分分けて集計した。

(3) 両群を分けて、対比するとそれぞれの群の特徴が浮かび上がり、従来のひきこもり群の考察にも資することが分かった。

(4) 内閣府の調査による、「ひきこもり親和群」との比較も試みた。

## 2 ひきこもりA群とB群の特徴

(1) 性別、年齢、ひきこもり期間など

### ①ひきこもりA群

男子が多い(71.4%)。30代はなく40代が57.2%と高齢化傾向がみられる。同居者数は2人暮らしが57.1%と多い。ひきこもりになった年齢は20、30代が8割で、ひきこもり期間は7年以上が57.1%で、5年以上が85.7%を占める。学校、職場などが少ないながらきっかけになっている。学歴は専門学校までが71.5%である。

### ②ひきこもりB群

女子が多い(81.8%)。10代もあり、30代までが81.9%を占めるのはA群と同様であるが、40代からという事例もある。ひきこもり期間は、6か月から1年未満が36.4%であるが、一方で5年以上が45.5%（うち7年以上が36.4%）と、長期化事例があるのも注目される。きっかけは、病気が36.4%、妊娠が18.2%で、A群と異なる。学歴は専門学校までが54.6%で、短大以上45.5%と学歴はA群よりやや高い。

### ③ひきこもり親和群

女子が多い（回答者一般もこの傾向があり、有意差はないと思われる）。年齢は各世代にわたるが、20代までが53.0%で、30代が35.3%で、合わせれば88.3%となり若い世代に当たる。同居家族は、母親64.7%、父親58.8%で、配偶者が29.4%と未婚の人が多いようである。一人暮らしも14.7%である。

## (2) 現在の生活

### ①ひきこもりA群

職業は、正社員、無職が 28.6%であり、正社員で休職中の人が含まれているかと思われる。「ふだん自宅でよくしていること」は、テレビを見るが 85.7%、ついで本、漫画、インターネットが 42.9%、通院手段としては携帯電話のメールが 57.1%となる。その他 SNS、ミニブログが 28.6%、であるが、何もしてない人が 28.6%あるのが特徴的と言えよう。

### ②ひきこもりB群

職業は、専業主婦・主夫が 36.4%で、無職と合わせると 72.8%になる。「ふだん自宅でよくしていること」は、家事・育児が 81.8%、ついでインターネット 45.5%となる。本、雑誌、新聞などは少ない。通信手段では携帯電話のメールが 81.8%、ウェブサイトブログ関係が 45.5%で、少人数の人との交流がある点で、A群と差が出ている。

### ③ひきこもり親和群

職業は正社員が 52.9%と一般より多く、学生がついで 17.6%となるが一般と同率である。ふだん自宅ではテレビが 67.6%、インターネットが 64.7%で、一般の人と同じような傾向を示している。ゲームが一般より多いのは若年層のせいであろう。通信手段では、携帯電話でのメールが 73.5%、ついで SNS の閲覧、書き込み 52.9%、携帯電話での通話が 50.0%となる。

## (3) 小中学校時代の学校での経験

### ①ひきこもりA群

学校では、B群とも不登校経験者が 0%だが、問 20 の回答によれば、ひきこもりのきっかけとして不登校をあげている人が 14.3%いる。この数は予想より少ないが、サンプル数が少ないかもしれない。友達との関係では、「友達とよく話した」「仲の良い人が何人かいた」が 57.1%であるが、B群より少ない、また 57.1%だがB群より多いものは、「友達にいじめられた」「我慢することが多かった」である。その他B群より少ないものは「親友がいた」で、B群より多いものは「人と話したり一緒に行動したりするのが苦手であった」が 42.9%である。またパーセントとしては少ないが、B群と比べて多いのは「友達というよりも一人にいる方が楽だった」「友達をいじめた」などがある。友人との交流があまり良くないと言えよう。学校との関係では、「学校の勉強についていけなかった」が 42.9%であるが、「学校に良い思い出がない」「先生との関係がうまくいかなかった」は少ないのは、不登校経験者がいないのと同様である。

### ②ひきこもりB群

友達との関係では仲の良い友達がいた人が多いのが特徴といえるが、それでもいじめられたという人も多い。「仲の良い人が何人かいた」が 90.9%であり、「友達とよく話した」「親友がいた」が 72.7%ある。一方A群より少ないとはいえ「友達にいじめられた」が 45.5%で、学校の勉強についていけなかった」が 36.4%ある。またA群にない「いじめを見て見ぬふりをした」が 36.4%ある。色々問題はあっても、やや狭い人間関係の中で支えられていたとも考えられる。

### ③ひきこもり親和群

一番多いのは、「友達と良く話した」で 79.4%、ついで「親友がいた」、「仲の良い人が何人かいた」がそれぞれ 70.6%、ついで「友達にいじめられた」が 44.1%

「いじめを見て見ぬふりをした」「我慢することが多かった」が 38.2%ある。「集団の中で過ごすことが苦手であった」32.4%であった。いじめられたが、親しい友達もあったという点でB群によく似た傾向がみられる。

#### (4) 小中学生時代の経験（家庭）

##### ①ひきこもりA群

「親のしつけが厳しかった」「何でも自分一人で決めて、家族に相談することはなかった」「将来の職業などを親に決められた」「小さいころから習い事やスポーツ活動に参加させられた」が、それぞれ 42.9%であった。次に多いのは、「親とは何でも話すことができた」「我慢をすることが多かった」が 28.6%であった。

##### ②ひきこもりB群

多いものは「親はしつけが厳しかった」「我慢をすることが多かった」が 45.5%あり、ついで「困ったときには親は親身になって助言をしてくれた」「親と自分との関係が良くなかった」は 36.4%で、この2つはA群では 0%であるのが特徴であろう。すなわちA群では、厳しく、将来を決めたりする親で、あまり関係が悪いわけではないが、親身に助言された体験もないのに対し、B群ではしつけが厳しく我慢をすることが多かったと体験し、関係が良くなかったと感じて（一部親身に助言するのを感じたりしているが）。そのため早く家庭を出て、結婚に至っているのかもしれない。

##### ③ひきこもり親和群

一番多いのは「小さいころから習い事やスポーツ活動に参加していた」50.0%で、一般人が 57.0%なので、一般の人に近いといえる。ついで、「親とは何でも話すことができた」「困った時は親は親身に助言してくれた」が同じ 38.2%で、「両親の関係がよくなかった」が 26.5%あり、やはりB群に似たパターンになる。

#### (5) 現在の状態について相談したいか、その相談先（ひきこもり親和群は対象外）

##### ①ひきこもりA群

現在の状況について相談したいという人は 14.3%で、「少し思う」という人を合わせても 42.9%である。「どのような機関なら相談したいか」という点に関しては、「自宅から近い」「当てはまるものがない」が 28.6%であり、実際に相談した経験のある人は 14.3%に留まった。

「困っていること」では、多いもので、「家族関係」「身体的な不調」がそれぞれ 42.9%、「就職のこと」「仕事や職場のこと」「子育てのこと」「精神的な不調」「性格のこと」「容姿のこと」「何となく不安である」がそれぞれ 28.6%である。

##### ②ひきこもりB群

相談したい人は、A群より多いが、18.2%に留まる。「どのような機関なら相談したいか」は、「自宅から近い」が 36.4%で、あとは「親身に聞いてくれる」「精神科医がいる」「無料で相談できる」「当てはまるものがない」がそれぞれ 27.3%である。

#### (6) 現在困っていること

##### ①ひきこもりA群

A群で困っていることが「家族関係」も多いので、相談したい機関について「当てはまるものはない」が多いのもうなずける。一方B群で多い「収入や生活費の



こと」が多くないのは、親に依存しているせいであろうか。

#### ②ひきこもりB群

現在困っていることでは、収入や生活費のことが54.5%と最多で、ついで「精神的な不調」が45.5%、「身体的な不調」「特に困っていることはない」が36.4%となる。困っていることはかなり現実的なことになる。また相談出来る所として「精神科医がいるところ」(27.3%)との回答は、「精神的な不調」に対応している。

#### ③ひきこもり親和群

「現在困っていること、悩んでいること」では、「仕事や職場のことが50.0%と多く、ついで「精神的な不調」が44.1%、「収入や生活費のことが41.2%、「なんとなく不安」が38.2%と悩みが多い人たちである。これらの点は一般の人と大きく異なっており、B群に近い。

### (7) 性格など — A群とB群の比較しながら

#### ①大切なことを決めるとき

A群では「大切なことを自分一人で決めるのが不安だ」という問いの回答で「はい」「どちらかといえばはい」を合わせると42.9%であるが、B群は90.9%と差も多く。他者への依存傾向が大きいと言えよう。ひきこもり親和群では64.7%、一般群では67.0%である。また「大切なことを決めるときは、親や教師の言うことに従わないと不安だ」という問いに対しては、A群で「はい」「どちらかといえばはい」合わせて42.9%で、依存傾向が強いB群で36.4%であるので、B群では親教師以外に相談することになるようである。親和群では29.4%で、一般群が27.7%である。

#### ②自分の特別な才能など

「内心特別な才能があると思っている」に対して「はい」「どちらかといえばはい」を合わせて、A群で42.9%、B群では18.2%、親和群で20.6%、一般群で13.2%であった。一方「その自分の独自性を理解されない」に対して「はい」「どちらかといえばはい」と答えた人が、A群で57.2%、B群で18.2%、親和群で17.6%、A群でやや自己愛的な傾向が強い人が多いと思われる。

#### ③対人関係、相互関係

「初対面の人とすぐに会話できる自信がある」という問いに対しては、グラフで明らかなように、「はい」もしくは「どちらかといえばはい」の割合が、A群<B群<親和群<一般とならぶ。

「人とのつき合い方が不器用なのではないかと悩む」については、A群では57.1%が「はい」で、どちらかといえば「はい」も含めると85.7%となる。B群では「どちらかといえばはい」も含めると72.8%となるが、「はい」は36.4%である。親和群では「はい」が32.4%、「どちらかといえばはい」を合わせると67.7%、一般群で「はい」が12.9%、「どちらかといえばはい」を合わせて44.8%である。A群に強く感じている人が多いと言える、「感情を出すのが苦手」ということについては、「はい」がA群で42.9%、B群で36.4%、親和群で32.4%、一般群で9.5%である。

「どちらかといえばはい」も合わせると、A群で85.8%、B群で81.9%、親和群で64.8%、一般群で40.4%である。A群、B群ともに苦手な傾向がみられる。「周りの人ともめごとが起こったとき、どうやって解決したらいいかわからない」でもほぼ同じ傾向を示しており、全体として対人関係、相互関係においてA群の方がより苦手意識が強い人が多い。

#### ④他人からの干渉について

「たとえ親であっても自分のやりたいことに口出ししないでほしい」について「はい」はA群が42.9%、B群が45.5%、親和群が41.2%であるが、一般群で19.5%とである。どちらかと言えばも含めると、それぞれ71.5%、100%、82.4%、59.8%と、B群の拒否感が際立っている。一方「自分の生活のことで人から干渉されたくない」というのは「どちらかと言えばはい」を合わせると、両者とも100%である。親和群で91.2%、一般群で76.2%であることを考えると干渉されたくないという気持ちは「ひきこもり」と関連が高いと言えよう。「はい」だけ見ると、B群54.5%、親和群が58.8%と高い点では共通している。

#### ⑤ひきこもりについての感じ方

親和群はその定義として「ひきこもる人の気持ちがわかる」という人を集めているため、他群との比較はできない。以下はA群とB群の比較を行う。

「閉じこもって外に出ない人たちの気持ちがわかる」はA群で「はい」は少なく、「どちらかと言えば」も含めて42.9%なのに対して、B群では「はい」が45.5%と多く、「どちらかといえばはい」を含めると72.8%となる点で大きく差が出ている。一方「自分も閉じこもりたい」についても同様な傾向があり、A群、B群とも「はい」が27~28%でほぼ同数であるが、A群では「どちらかといえばはい」は0%で、どちらかといえばいいえ」が57.1%と、自分の中の傾向を肯定しないのに対して、B群では「どちらかといえばはい」も含めると54.6%になる。一方嫌なことがあると外に出たくなくなるという問いに対しては、「どちらかといえばはい」を合わせて、A群で71.5%が肯定し、B群で72.8%が肯定している。しかし「理由があるなら閉じこもるのも仕方がない」という問いに対しては、肯定率はB群が高い。一つの解釈として、A群は閉じこもることについて良くないことと認識し、自己のしていることを肯定できないのに対して、B群ではある程度やむを得ないことと認識して、自分のしていることも許容できていると言えよう。

### (8) 現在の家族関係

#### ①ひきこもりA群

回答数の多いものを挙げると、「家族とはよく話をしている」が42.9%、「私の家族は温かい」が28.6%であるが、B群より少ない。「あてはまるものがない」が28.6%と多かった。「私たち家族は仲がいいと思う」が0%であったのは象徴的である。よく話し合っている人も4割近くあるが、仲が良いわけではないとなろう。

#### ②ひきこもりB群

「私たち家族は仲が良いと思う」が63.3%と一番多い（上記のようにA群は0%で対照的である）。次に高いのは、「家族とはよく話をしている」が45.5%で、「私の家族は温かい」「家族から十分に愛されていると思う」が36.4%である。ひきこもり群Bは、生育史では親との関係が必ずしも良くはなかったのに、現在の家族については肯定的な回答が多い。

#### ③ひきこもり親和群

「私の家族は温かい」「家族とはよく話をしている」が共に61.8%、「仲がよい」が52.9%、「家族から十分に愛されている」が50.0%と一般群より若干低いが、「仲がよい」を除いてB群より高いポイントを示している。

すなわち、「仲がよい」以外は、A<B<親和群<一般というように、ポイントが並ぶ。

### (9) 悩み事について

「悩みを誰かに相談したいと思いますか」という問いに対して、A群は非常に思うが14.3%、「思う」が42.9%あり、少し思うも入れると85.8%であり、B群では、「相談したいと思う」が27.3%、「少し思う」が63.6%で、合わせると90.9%となる。親和群では、「非常に思う」、「思う」を合わせると52.9%になり、「少し思う」まで入れると、85.3%になるが、一般群も親和群と同様なパターンであり、悩みが多いのが普通なのかもしれない。むしろB群で「非常に思う」がなく、「思う」も27.3%と、すべての群の中で最も低く、「少し思う」という人が63.6%と多いのが特徴と言えよう。これは上記の家族関係が良好ということと関係があるかも知れない。

ふだん悩み事を誰に相談するか、という問いに対して、A群では、親、兄弟姉妹、配偶者がそれぞれ28.6%、B群では配偶者が45.5%と最も多く、ついで親、兄弟、友人知人がそれぞれ36.4%であり、カウンセラー・精神科医が27.3%である。A群との差は友人知人が多いこと、カウンセラー・精神科医が挙げられるのは、精神的不調を訴える人が一定数入っているからであろう。また相談したい傾向が少ないと指摘したことも、相談できる人が身近にあるせいかもしれない。

A群は相談したい気持ちが強いが、相談できるのは身内が多く、誰にも相談できない人も多い。また専門家に相談する人はいないようである。このあたりもB群は様々な人に相談しており、「対人関係の悪くないひきこもり」の特徴が出ているようである。一方親和群では、友人・知人が52.9%で、ついで親が47.1%、兄弟・姉妹が20.6%となる。これらは配偶者を除き、一般群とあまり変わらない。ただし一般群では職場の同僚・上司が24.0%あるのに対して、親和群は11.8%に留まっている。

### (10) 自立した若者の条件について

ひきこもりA群では、「あいさつができること」が71.4%と最も多く、ついで「身の回りのことができること」が57.1%、「自分のことは自分で決めて行動できること」が42.9%となる。「あいさつができる」を自立の条件とみる視点、経済的自立や集団のルールを守ることについては少ないことから「社会性のない自立概念」と言えよう。

B群では、「身の回りのことができる」が63.6%、「親から経済的に自立していること」が54.5%、「集団のルールを守れること」が45.5%である。親和群では、「親から経済的に自立している」が50.0%で、ついで「集団のルールを守る」が41.2%、「身の回りのことができる」が35.3%となる。一般群でも同じ傾向を示しており、「経済的自立」が49.4%、「自分のことは自分で決めて行動する」が40.3%、「集団のルールを守る」が36.1%である。

## 3 まとめ

以上細かく検討してきたが、同じようにひきこもりの要件を満たすものの、A群とB群は異なる一群であることが分かった。以下両群、親和群についてまとめてみる。

### (1) ひきこもりA群

従来言われていたひきこもりの特徴を示す群と言えよう。男子が多く、母親との2人暮らしが多い。正社員、無職がおおく、生活ではテレビや本などを読んで過ごしている。小中学生の頃の学校体験では、友達とよく話したとする人も多いが、いじめられた、我慢することが多かった、と否定的な経験も比較的多い。しかし今回の調査では不登校経験がないという人達のせい、勉強についていけなかったとする人も多い

のに、「学校にいい思い出がない」と答えた人は少なかった。一方家庭では、親のしつけが厳しかった、将来の職業などを親に決められた」という回答多い反面「何ごとも自分一人できめて親に相談しなかった」という回答も多かった。親との関係が良くなかったという回答がなかったことから、親との関係は比較的良好と言えよう。

相談したいことはあるが、内容は家族との関係、身体的な不調などで、適当な相談できるところがないという感じである。

性格については、大切なことを決めるのに自分一人で決めることの不安について一般群より少なく、親教師の言うことに従わないと不安という人も一般より多い。一人で決めることに慣れているのと、親との関わりが多いせいかもしれない。内心特別な才能を持っているという人の率が他の群より高く、独自性が理解されないと思う率も高いことから、自己愛的傾向が強いと言える。この点は、関わる際に留意すべきであろう。一方対人関係は不器用など苦手な傾向が強い。これは他者からの干渉を嫌う傾向の強さとも関係があるかも知れない。一方他者がひきこもることに対する感じ方は、気持ちが分かるという人は4割程度で、嫌なことがあれば外に出たくなくなる気持ちを7割が認めるが、理由があれば仕方がないと感じる人も7割程度で、B群よりかなり低く、ひきこもることに対して共感、肯定感が少ないと思われる。

現在の家族関係では、家族とよく話すが、温かいという人は3割弱で、仲がいいということもないようである。悩み事は8割以上あるが、親兄弟、配偶者に相談する位で、誰にも相談しない人も少なからずある。

自立した若者の条件として、あいさつができる、身の回りのことができること、などを挙げる人が多く、他の群の人が多く挙げている経済的自立、社会的ルールなどを挙げる人が少ないため「社会性のない自立意識」とまとめられよう。

以上この調査からA群に特徴的と思われる点を挙げた。

## (2) ひきこもりB群

女子に多い、40代からの人もある、ひきこもり期間は3割くらいが「6か月から1年未満」であるが、「5年以上」も4割強（うち「7年以上」が3割強）と長期化した事例も多い。きっかけは、病気、妊娠などで、A群と異なる。学歴は短大以上も多く、A群より高い傾向がある。職業は、主婦・主夫が3割強で無職と合わせると7割位となる。家事・育児、インターネットをして過ごし、通信手段は携帯電話のメールが8割と多く、少人数の人との交流がある点がA群と異なる。

小中学校時代の学校での経験は、いじめられ体験もあるが、仲のよい友達が多いなど、やや狭い人間関係で支えられていたと思われる。家庭での経験は、親はしつけが厳しかった、我慢をすることが多かった、親との関係が良くなかったという人が多く、一方親が親身になって助言をしてくれたという人も3割強あるものの、親とはあまり関係が良くなかった傾向が見られ、そのために早く家庭を出て結婚し現在の家族関係は良いというように読める。

相談したい人は3割強でA群より多いが、相談したい機関は自宅から近いところが3割強、親身になって聞いてくれる、精神科医がいる、無料で相談できる、などとする人が3割弱ある。現在困っていることでは、収入や生活費のことが5割強で、精神的な不調が4割強、身体的な不調が3割強などである。困っていることが精神的な不調という人が、相談できる機関として精神科医がいるところを挙げているかと思われる。

性格特徴では、「大切なことを自分一人で決めるとのが不安だ」という人が9割あり、しかし大切なことを決めるときに親や教師の言うことに従わないと不安だ」につ

いては、「はい」「どちらかと言えばはい」を合わせて3割強であるので、親教師以外の人（友人、知人など）に相談すると思われる。この点もA群と異なる傾向である。

内心特別な才能を持っている、自分の独自性を理解されないという自己愛的傾向については、さほど多くなく、親和群、一般群に近い。

対人関係では、人見知り、不器用、感情を出すのが苦手、もめ事解決など、全体としてA群がその傾向が強く、B群、親和群、一般群というように並んでいる。

他人からの干渉を拒む傾向は、B群が強く、「どちらかといえばはい」も入れると100%になる。「生活のことで干渉されたくない」という問いに対する回答は「どちらかと言えばはい」を含めるとB群はA群とともに100%であり、干渉されたくない傾向は「ひきこもり度」と関係があるかと前述したとおりである。

ひきこもりに対する感じ方では、A群が共感性が低いのに対して、B群は共感性が高く、自分の中の傾向についても肯定しており、親和群と似ていると言えよう。

現在の家族関係については「仲が良い」が6割位あり、その他肯定的な回答が多いことは、同じひきこもりでもA群の0割と対照的である。すなわち仲が良い家族の中で、ある程度理解されてひきこもっていることになる。

悩み事については、むしろ少ない傾向にあるのは上記の家族関係が良い事と関係があるかも知れない。親への反発はあるものの、親しい友人、配偶者などとの関係は悪くないB群の特徴と言えよう。

### (3) ひきこもり親和群について

この群については、総理府の調査でも論じられており、すでにひきこもり群、B群との対比で論じてきた。また直接支援の対象とならないので改めてまとめることはしないが、「親和群」の位置づけについて、総理府の調査(2010年)のコメントと比較して若干考察する。

内閣府の調査のコメントとして、高塚は臨床心理学の立場から以下のように述べている。

「全体的な傾向として「ひきこもり群」とよく似ているのだが、「引きこもり群」が学校で我慢することが多かった(55.9%)」と他群を抜いて多いのに比べると「ひきこもり親和群」は家庭で我慢することの方が多という違いがある。・・・「ひきこもり群」は外の世界よりも家の内の方が居心地が良いということになるかも知れない。また「ひきこもり親和群」は年齢的には25歳以下が約半数であり、在学中としているものが多く(37.4%)、学歴面では約半数が高校以下であるのに比べ、「ひきこもり群」では、約2/3が専門学校以上の学歴をあげており、成熟度、意識差などの違いが表れているのかもしれない。しかしそうだとすると「ひきこもり親和群」の中からやがて「ひきこもり」になっていく可能性を持つ者がやはり一程度存在するという予測は出来そうである。現段階における傾向からすると、特に男性の「ひきこもり親和群」にその傾向が高いような気がする。(引用終わり)

今回の知多市の調査からは、度々指摘したように親和群は、ひきこもり群Bに近いパターンを示しており、もし予備群というならば、ひきこもりB群の予備群になるかも知れないと言える。

一方、松井らは社会心理学の立場からのコメントの中で、ひきこもり親和群について3つの特徴を挙げている。①うつ傾向と暴力傾向、②親から厳しくコミュニケーションの乏しいしつけを受けたために現在は家族との情緒的絆が弱く、親からの干渉に対して両価的な態度を有している点に特徴が見られる。③ひきこもらずにすんでいる

1つの理由は話ができる友人がいたことにあるものと推定される。

本調査では暴力傾向の問いがなかったため、単純比較はできないが、②、③の特徴は出ているように思われる。

## 「ぬくもりのあるまち」のために

### —「若者の意識及び市民の若者に対する意識調査」結果からわかること—

愛知県立大学教育福祉学部社会福祉学科 准教授  
宇都宮みのり

#### はじめに

2014年9月12日から10月12日にかけて、知多市青少年居場所づくり実行委員会(知多市社会福祉協議会・若者応援隊まなざし・不登校の明日を考える会トゥモローネットの三者共同体)が「若者の意識及び市民の若者に対する意識調査」を実施した。かなり煩雑なアンケートであったにもかかわらず675人(33.75%)の方が貴重な意見を届けてくださった。

本調査は知多市が今後の支援策を講ずるために活用される。支援策は当事者主体で進めるものである。当事者が何に困っていて何を求めているかをくみ取り、そこから必要な支援を組み立てていくことになる。私は、知多市が住みよい町になっていくことを願い、本調査結果から、①ひきこもりA群に分類された人たちが抱える思い、②ひきこもりB群に分類された人たちが抱える思い、③自由記述欄に書いてくださった市民のご意見を整理することを通して、地域社会に求められることについて検討していきたい<sup>1</sup>。

#### 1 ひきこもりA群の人に対する支援

ひきこもり群と言っても、一人ひとり全く違う経験や背景や感情を有している。支援はその一人ひとりの状況を尊重することから始まる。それをふまえた上で、個人が特定されずに有効な支援策を検討するために、あえてひきこもりA群(以下、A群とする。)の人たちの回答を集めて、ある典型的なストーリーを作ってみた<sup>2</sup>。

##### A群

私は45歳の男性で、母親と2人暮らしである。小学校の頃いじめられ(57.1%)、集団の中で過ごすことが苦手(28.6%)だった。勉強についていけず(42.9%)、我慢することが多かった(57.1%)。親は厳しかった(42.9%)ので、家族に相談することはしなかった(42.9%)。専門学校を卒業後、アルバイトをしたが、今は無職である。普段は家にいて、時々近所に出かけている。家ではテレビを見たり(85.7%)、本を読んだり(42.9%)、携帯やPCでメールをしたり(71.4%)、フェイスブックやツイッターに書き込みをして(42.9%)過ごしている。現在の状態になったのは28歳のころ(平均)である。私は、感情を表に出すのが苦手(85.7%)で、人との付き合い方が不器用(85.7%)なので、周りの人ともめごとが起こった時にどうやって解決したらよいかわからなくなってしまう(71.4%)。大事なことを自分一人で決めてしまうのは不安(42.9%)なので、親や教師の言うことに従う方(42.9%)だった。しかし本当は、私は自分のやりたいことに口出ししてほしくない(71.4%)し、自分の生活のことで人から干渉されたくはない(100%)。私は普通の人にはなかなか理解されなくて困っている(57.1%)。この状況について専門家に相談したことはない(85.7%)が、家族のことや身体や精神の不調のことで悩んでいる(71.4%)ので、もし自宅から近くで(28.6%)、親身に聴いてくれる(14.3%)なら相談してもよいと思っている。

支援目標をどこにおくかを考えることはとても大切である。つまり「何をもってゴールとするか」の検討である。社会からひきこもっている人に対して、「学校復帰」「職場復帰」「経済的自立」を

<sup>1</sup> 昨年の研究で、内閣府調査データのクリーニング作業を行って再検証した結果、調査でひきこもり判定を受けた59人のうち8人をひきこもり群から除外でき、ひきこもり発現率を1.55%(6万2039人)、区間推定値を76万642~43万8,036人に修正したものがあ(井出草平 2014「内閣府ひきこもり調査の検討-調査法、ひきこもり票の検討、社会的関係、不登校経験率-」『四天王寺大学紀要』58、179-202:186)。同様の作業を知多市調査に行くと、以下のことが分かった。ひきこもりA群の中には、問10「現在の就業状況」に「勤めている(正社員)」と回答した人が2人含まれている。この人たちは、問17「外出頻度」という問いに対して、それぞれ「ふだん家にいるが、自分の趣味に関する用事の時だけ外出する」、「ふだん家にいるが近所のコンビニなどには出かける」と回答している。内閣府の定義に照らしたひきこもり群である可能性があるとするれば、休職中という可能性があるが、問19「現在の状態になってどのくらいたつたか」の問いに「5年から7年」「7年以上」と答えており、常識的に休職中とは考えにくい。しかし問21「現在の状態について関係機関に相談したいか」の問いでは「思う」「少し思う」と選択している。この2人については、自宅の仕事をしていて外出頻度が極端に少ない人か、「ふだんは仕事で平日は毎日外出するが、休日は時々外出する」という人が問17で誤答した可能性も否定できない。ひきこもりB群にも「勤めている(正社員)」が1人いる。「ふだん家にいるが、近所のコンビニなどには出かける、その期間は6か月から1年未満」、「医療機関に相談したい」と回答している。この人は休職中の可能性もある。この3人についてさらなる検証作業が必要であるが、本分析の目的は、支援の方向性を探ることにあるために、「関係機関に相談したいと思っている」という「困り感」に着目し、内閣府調査と同様にひきこもり傾向群に含めている。

<sup>2</sup> ( )内の%は回答した人の割合を示す。小数点以下第2位を四捨五入し、小数点以下第1位までを表記しているため、前述の報告書の数字と小数点以下において若干異なることがある。

願いがちである。しかし、A群の分析結果から導きだした像からは、①「自分に対する信頼感のなさ」、②「人に対する苦手意識」、そして③やりたいことがあるが不安という「アンビバレントさ」を有するという特徴を見出した。これらの要素は互いに影響しあい、踏み出そうとする一歩をためらわせるものとなる。この心情を理解する手がかりとして、過去の抑圧体験があったことが浮かび上がってきた。そして「小中学校の頃いじめられ、我慢することも多く、勉強についていけず、集団の中で過ごすことが苦手だった」という“交流経験の乏しさ”と、「親は厳しく、家族に相談することはなかった」という“解決経験の乏しさ”が見いだせる。人は、気が滅入るような生活、抗しがたい状況、冷たい社会の反応を体験すると、自分の人生を自分が生きているという感覚を失いがちとなる。自己や他者への信頼感のなさや苦手意識を有する痛みと、それらを有するに至る経緯の理解を飛び越えて、いきなり「学校復帰」「職場復帰」「経済的自立」の目標を掲げても、本人にとって「現実的な目標」とはなりにくい。人は、様々な失敗あるいは成功体験を積み重ね、その中から生きる知恵を学習し社会化する。その適切な機会と場に恵まれなかったのであれば、やや抽象的な言い方になるが、支援の根拠は「生存や発達に関する権利の保障」となる。そして自己を信頼し、他者を信頼でき、自分らしさを回復し、自分で自分の人生を統制し、生活に目的を見出していく過程そのものが支援目標になる。

そのために何が重要かということについて、本調査から、「場」と「人」の重要性が明確になった。A群の人は、「この状況を関係機関に相談したことはないが、困っているのは家族のことや身体や心の不調のことで、もし自宅から近くて、親身にきいてくれるなら相談してもよい」と言う。逆説的に、これまでは安心できる場がなく親身に聴いてくれる人がいなかったから相談できなかったとも受け取れる。「安心できる場」のイメージは、刺激が少ない自宅の近くにあることである。さりげない小さな居場所が、自分の状況に合わせて選択できるくらいに複数箇所あることが理想的だろう。また「親身に聞いてくれる人」とは、自己信頼・他者信頼の低さの背景を理解してくれる人であり、交流経験や解決経験をともにする人であり、自分のやりたいことを否定しない人であるとわかってきた。今の状態を受け入れてくれるベテランの人と、比較的年齢の近い人を組み合わせた人々との交流によって小さな成功体験を積み重ねることが理想的だろう。

## 2 ひきこもりB群の人に対する支援

同じように、ひきこもりB群(以下B群とする。)の人の回答を集めて、ある典型的なストーリーを作ってみた。

### B群

私は35歳女性で、夫と子どもの3人暮らしである。小学校のころは仲が良い友達がいいた(90.9%)が、いじめを受けたりいじめたり、いじめを見て見ぬふりをしている(63.6%)あまりいい思い出がない。親は厳しかったし、親との関係はよくなかったので、物事を親に相談することはあまりなかった(63.6%)。29歳で精神的不調をきっかけにひきこもるようになった。今は専業主婦で、普段は家にいるが時々近所には出かけている(100%)。特に生活費(54.5%)や子育てのこと(27.3%)が心配で、自分の容姿(27.3%)や居場所のなさ(18.2%)も苦になる。私は、大事なことを自分一人で決めてしまうのは不安(90.9%)だが、親や教師の言うことに従わなくてはならないとも思わない(63.6%)し、むしろ自分の生活のことにはたとえ親であっても干渉されたくない(100%)。初対面の人と話すのは苦にならない(45.5%)が、人との付き合い方が不器用(72.7%)なことに悩んでいる。嫌なことがあると外に出たくなくなる人の気持ちはわかる(72.7%)し、自分も出たくなくなる(72.7%)。困ったことがあると身内に相談する(72.7%)以外に、相談できる知人や上司がいる(45.4%)。病気のことでは医療専門職に相談(27.3%)している。

B群とは、病気や妊娠、子育て等をきっかけとして6か月以上ひきこもりの状況にある人たちである。内閣府調査では、病気や妊娠、子育て等をきっかけとする人をひきこもり統計から外している。しかし本調査では今後の支援の検討を目的としているため、「困り感」に着目してB群も分析対象としている。

B群の分析の結果わかったことは、①生活上困っているという事実はA群と変わらないこと、②



自己信頼の低さや他者とのコミュニケーションの問題よりも生活費や子育てという具体的な生活上の問題を抱えていること、そして、③A群では家族などごく近い身近な人にしか相談できなかったのに対し、B群では友人・知人、医療機関等の専門職につながっていることである。フォーマルあるいはインフォーマルな資源につながっていることはB群の人たちの強みである。支援者がネットワークとしてこの利点を生かした関わりができる可能性があるのではないか。「ひきこもり傾向×経済的支援」、「ひきこもり傾向×子育て支援」というような「複合課題に対するネットワーク力」が発揮できる群である。

### 3 A群B群に共通する支援

A群の中に、自分が「ひきこもり」とであると認識している人は一人もいなかった。これは本調査最大の成果の一つであろう。B群においても、11人中7人は自分が「ひきこもり」とであると認識していない。自分を「ひきこもり」と思っていない人は、自分が、市が実施する「ひきこもり」対策事業の対象に相当するとは考えないし、事業そのものにも関心をもたないだろう。ということは、情報を、支援を必要とする人に確かに届けるための工夫が必要となる。おそらく1つ目は家族支援がキーになろう。A群全員には同居する家族がいる。一人を除き、困ったら家族に相談をしている。A群の人が困っていたのは、家族のこと、身体的・精神的不調が多い。家族に関する相談を家族にしている現状は、双方にとって建設的解決法とは言えず、むしろ双方の負担感が増すことであろう。本人は、どちらかという自ら情報を収集することに関心は薄く、通信手段をまったく利用していない人を含め、一方向の発信を好む傾向があるようである。本人・家族双方の負担軽減のためにも、まず家族に届くメッセージ発信について検討の余地がある。家族にこそ、まずは支援の手は届けられるべきであるし、同時に、家族は最も身近な支援者ともなりうる重要な存在である。2つ目は、支援事業のネーミングにセンスが必要となる。「ひきこもり」という名称にこだわるよりも、支援対象と内容を端的に伝えるものがよかろう。本人または家族が何かに困って検索した時に、支援対象や支援内容がヒットすれば、そしてそれらの支援内容が魅力的であれば、支援につながる可能性が高まる。3つ目は、困りごとに焦点を当てた支援ネットワークそのものの必要性がより高まったということである。身体的・精神的不調に関して適切な医療機関を本人が選択受診できるような「つなぎ」ができること、B群においては、前述したような生活費の問題、子育ての問題等に対応できる専門職への「つなぎ」ができること、また関係機関の専門職からの発信をしていただくことなどが考えられる。

### 4 自立のイメージの違いに関する相互理解

A群の人が抱く自立のイメージを文章にすると、「あいさつができること(71.4%)が第一で、洗濯や掃除など自分の身の回りのことができ(57.1%)、自分のことは自分で決めて行動できること(42.9%)」であり、「経済的に自立していること(28.6%)」は少ない。B群の人が抱く自立のイメージは「洗濯や掃除など自分の身の回りのことができ(63.6%)で、経済的に自立(54.5%)し、集団でのルールを守れて(45.5%)、他人と円滑にコミュニケーションがとれること(36.4%)」と言っている。一方、一般群の人が抱く自立のイメージは、「親から経済的に自立していること(49.4%)が第一で、自分のことは自分で決めて行動でき(40.3%)、学校や職場等で集団のルールを守れる(36.1%)こと」と言っている。

自立に対するイメージの違いがこれほど明確に出たことは、本調査の際立つ発見といえる。A群やB群の人が抱く自立のイメージと、一般市民が抱くイメージにはギャップがある。A群B群の人

はまさにこのギャップに悩んでいる。しかしギャップがあることはお互いに気づいていない。それがA群B群にとっては「自分のことをなぜか分かってもらえない」という声になり、市民からは「ひきこもりの人は甘えている感じがする」という声になっている。ギャップがあることがわかれば、いずれの思いも「真実」であることがわかる。理解なき自己責任論ではなく、お互いに理解を深め、伸びようとする芽をあたたかく見守り、適切に伸ばす関係性が双方を高めることになる。

## 5 自由記述欄にみる地域社会づくりのアイデア

ここでは、すべての群の回答者による問34「自由記述」を概観する。「自由記述」欄に記載されたコメント189件を見ると、①本人、②家族、③学校、④学校以外の地域、⑤行政への提案、に大別することができた。ここでは紙面の都合上、④と⑤に分類できた意見の中から「提案」を抽出し報告する。

学校以外の地域における支援に関する意見は「育ちの場・機会の提案」でもある。「先生でもなく親でもない第三者の方が話しやすい」人もいるので、「学校以外のシステム」「学校以外の認めてあげられる場所」「学校以外で地域交流できる場」が必要という意見である。イメージとしては、「ひきこもりの方を温かく受け入れる環境」「地域の先輩後輩などと触れ合った子ども会」「習い事でできた友達との交流」「自立できる場としての居場所」「地域の人たちや家族も含めて楽しんだり学んだりする場」「がまんしないで話ができる場」「あまり干渉されず個人プレーで働ける環境」等、優しい市民の声が集まった。

具体的な提案も多くあった。提案をひきこもりの人の回復段階に照らして整理したい。①まだ緊張が強いひきこもりの状態にある人にとっては、刺激の少ない場にまず一歩踏み出すことが当面の目標となる。その時には、「人と触れたくないのなら、草木花、農業、動物などと接する」といった方法が活用できる。②いくらか社会的な活動ができるようになった段階では、「若者（元気ではない、おとなしい若者）が集うことができるイベント」「子どもから大人まで楽しめる行事」を開催することができる。③働けるかどうか、試してみようという段階になっていれば、「行政のような事務的な場所ではなく町工場のような所」で居場所を設けることや、「地元企業と若者を結ぶ調整役として地元の人材が活躍し、継続的に支援する仕組み」ということも素晴らしいアイデアである。

行政に求める社会的支援の仕組みとしては、①専門的な相談活動、②雇用創出・就労支援事業が挙げた。「ひきこもりに限らず、何かに困った時に『まずはこちらにご相談を』というのが、ただ1か所に明確に決められていること」という意見は重要である。縦割り行政組織は、利用する市民からは不親切に見える。総合的な相談窓口の機能は利用しやすく、予防や早期介入にも結びつくものともなる。

## おわりに

複合的な要因のもとで生きづらさを抱えている人たちの支援を考える上で、個々の医学的側面や心理状況を理解する必要性は言うまでもないが、地域社会をいかに築き上げるかという視点での検討も不可欠である。知多市の「若者の意識及び市民の若者に対する意識調査」の結果から、地域社会に求められるものとして多くの示唆を得ることができた。それらの中で本報告書では、①安心できる居場所、②親身になって話を聴いてくれる人、③複合課題に対応するネットワーク力、④情報を届ける工夫、⑤総合的な相談窓口の5つを挙げてみた。ひきこもる人たちへの支援は、「生存や発達に関する権利の保障」を目標として、教育・福祉・保健・医療・雇用等あらゆる分野の施策を

視野に入れる必要がある。実際の支援活動の方向性は、ひきこもりを含む生きづらさを抱える人たちが、自分を取り戻し、人生の主体として、市民とともに「ぬくもりのあるまち(\*)」を築き上げるということが目指されることになるだろう (\*「ぬくもりのあるまち」は、2008年頃から知多市社協が中心となって、知多市の医療機関・NPO 団体などの支援団体が連携しながら続けている、地道であたたかい実践活動のキャッチコピーである)。